

# 日蓮聖人出家動機の考察

最上雅友

## はじめに

日蓮聖人の思想形成の過程を明らかにして行こうとした際、私が最初に行き当った問題点は、日蓮聖人が出家をなされるに至った動機に関する点であった。つまり、日蓮聖人は何故、出家をなされたのかという素朴な疑問点なのである。

日蓮聖人（以後聖人と略す）の出家の動機について考察を加えた結果として、その理由を人生への無常感からとするものや、仏教を通じての知的探究にあるとするものなど、古来、諸説が唱えられている。

ここではまず、聖人が御遺文の中で述べられた出家動機の主なるものに考察を加え、次に後世（ここでは主に明治以後）の諸説に眼を向け、代表的なものの分類を試み、総合的な聖人の出家の動機を提示確認してみたいと

思う次第である。

しかしながらこの小論は、あくまでも、私の聖人研究においての、聖人の出家の動機の考察確認という極めて初期的かつ私的研究結果であることをあらかじめおことわり致しておきたい。

## 一

ではまず、聖人が出家動機に関して述べられた御遺文であると思われるものを抜き出してみよう。

『善無畏三藏鈔』(1)、『佐渡御勘気抄』(2)、『開目抄』(3)、『神国王御書』(4)、『清澄寺大衆中』(5)、『報恩抄』(6)、『破良観等御書』(7)、『四条金吾殿御返事』(8)、『妙法尼御前御返事』(9)、『妙法比丘尼御返事』(10)、『本尊問答抄』(11)

これ等が出家動機について触れられていると思われる

ものである。もちろんこれ等以外にもあるかと思うが、ここでは以上のもののように、具体的に出家動機について述べられていると思われるものに限った。

これ等を内容から分類すると、次の様に分けられる。

一、(一)『善無畏三藏抄』四十九歳

「幼少の時より虚空藏菩薩に願を立て云く、日本第一の智者となし結へ云云。虚空藏菩薩眼前に高僧とならせ給て明星の如くなる智慧の宝珠を授させ給き。」

(二)『清澄寺大衆中』五十五歳

「生身の虚空藏菩薩より大智慧を給りし事ありき。日本第一の智者となし給へと申せし事を不便とや思食けん。明星の如なる大宝珠を給て右の袖にうけとり候し故に、一切経を見候しかば八宗並に一切経の勝劣粗是を知りぬ。」

(三)『破良観等御書』五十五歳

「予はかつしろしめされて候がごとく、幼少の時より学文に心をかけし上、大虚空藏菩薩の御宝前に願を立、日本第一の智者となし給へ。十二のとしより此願を立。」

(四)『本尊問答抄』五十七歳

「人はおしへず、十宗の元起勝劣たやすくわきまえがたきところに、たまたま仏菩薩に祈請して、一切経論を勤て十宗に合わせたるに……」

——智者への願望を動機とする一群——

二、(一)『四条金吾殿御返事』五十六歳

「日蓮少より今生のいのりなし。只仏にならんとをもふ計也。」

(二)『妙法尼御前御返事』五十七歳

「夫以ば日蓮幼少の時より仏法を学び候しが念願すらく人の寿命は無常也。」

(三)『妙法比丘尼御返事』五十七歳

「民の家より出て頭をそり袈裟をきたり。此度いかにもして仏種をもうへ、生死を離るる身とならんと思て候し……」

——無常感からの出家とする一群——

三、(一)『佐渡御勸気抄』五十歳

「本より学文し候し事は仏教をきはめて仏になり、恩ある人をもたすけんと思ふ。」

(二)『開目抄』五十一歳

「父母の家を出て出家の身となるは必父母をすくはんがためなり。」

四、——報恩の為の出家とする一群——  
(一)『報恩抄』五十五歳

「世間をみるに、各々我も我もといへど国主は但一人なり。二人となれば国土おだやかならず。(中略)一切経も又かくのごとくや有らん。何の経にてもをばせ、一経こそ一切経の大王にておはすらめ。」

(二)『妙法比丘尼御返事』五十七歳

「皆人の願せ給事なれば、阿弥陀仏をたのみ奉り、幼少より名号を唱候し程に、いささかの事ありて、此事を疑し故に一の願をおこす。日本国に渡れる処の仏教(中略)此等の宗々枝葉をばこまかに習はずとも、所詮肝要を知る身とならばやと思し故……」

五、——仏教乱交への疑問からの出家とする一群——  
(一)『神国王御書』五十五歳

「仏法を流布の国主とならん人々は能能御案ありて、後生をも定め、御いのりも有るべきか。而に日蓮此事を疑しゆへに、幼少の比より随分に顕密二道竝に諸宗一切経を、或は人にならい、或は我と開見し、勘見て候へば、故の候けるぞ。」

——国家に対する疑問の解決の為の出家とする一群——

以上の五つの内容形態に分けられる。この五項の各々について検討を加えてみたいと思う次第である。

一項では、(一)(二)を通じて、虚空蔵菩薩に『日本第一の智者となし給へ』という願いを発し、その結果大いなる智慧をさずかったと述べられている。その為には仏教の最大事を見い出すことができたことと示されているのである。(四)は、多少前者と異なるが十宗の元起勝劣の判別に、かねての仏菩薩への初請が役立ったことを述べられているのである。これは四項にいれるべきなのかも知れないが、仏菩薩への祈請について触れているので一項に入れた。

ここでは、「日本第一の智者」の『智者』の語が大きくな意味をなすと思われるので、今少しこの語について検討してゆきたい。

聖人が学問的な意味での智者と同義として語られる語句としては、他に智人・学匠・学者・善智識などが遺文中にみえるが、ここでの『智者』は、単なる主知的な学問的な意味での智慧を持ったものをさしているのではない。これらの智者の用例は、あくまで仏法の真理を知り

ぬく智慧を持った人物を指し示しているのである。

聖人の御遺文の中から『智者』の意味を示す例を引用してみると、『報恩抄』に

「いかにいわうや、仏教をならはん者の、父母・師匠・国恩をわするべしや。此の大恩をほうぜんには必ず仏法をならひきはめ、智者とならで叶べきか。」(一一九二頁)『頼基陳状』に、「智者と申は国のあやうきをいさめ、人の邪見を申とどむるこそ、智者にては候なれ」(三五一頁)

『蒙古使御書』に、

「夫大事の法門と申は別に候はず。時に当て為我爲国、大事なる事を、少も勘へたがへざるが智者にては候也。」(一一一三頁)

などと述べられて、智者を定義されているのがみうけられるのである。

ちなみに、久保田正文先生はその著書(12)の中で、「この智者という言葉は、事柄をわきまえ、教養を十分につけた者という意味である。それは後年彼が著した開目抄の中に出ている。『智者に我義破れずば用じ』(13)という使い方によって彼の言う智者という言葉の意味が了解できる。」と述べられている。

また、里見岸雄先生によれば(14)、「元来仏法は道理にはかならないのであるから、いやしくも仏法を志す以上、道理を智者とならなければならぬ。道理を智者には、智者・学匠とならねばならぬ」とし、また「日蓮聖人は唯徒らに物識りな学者になろうという考えではなかった、理性を尚ぶのも真智を愛するも己れにとっては成仏の道を明らかにする為であり、他に対しては、苦海に没在する衆生を、世間を、及至国家を救はんとするが為であると述べられているのである。

日蓮聖人が『清澄寺大衆中』等で申された智者という言葉には、単に知的な学識者という意味以上に大きな意義が含まれている。そしてその智者たらんと発する意識下には、出家して智者となることで「本より学文し候し事は仏教をきはめて仏になり、恩ある人をもたすけんと思ふ。」(三項の(二))という願がこめられていたであろうことは十分窺い知れることである。以上、一項にあげた遺文では、『智者』となるのが出家の目的であるとされているが、もちろんこの『智者』に二義あり、どちらの面を取るかで出家の理由も変化してくるのであって、この点に関しては、第二章で、例を引きながら述べて行きたいと思う次第である。

また『智者』となしたまへという願いを立てた時期を、幼少の時、あるいは十二歳と述べられている。更に幼少の時から学文を心がけたとあることについては、二項の(一)、四の(一)などの様にたびたび述べられているので、後にまた触れてみたい。

二項の遺文は、出家の動機は無常感から発しているのだとおわせている御文章である。無常なこの世の中の苦悩を解決する方法を仏教の中に求めた結果の出家だとおっしゃっているのである。しかしながら、これらの遺文がいづれも五十代後半の述懐であることや『妙法尼御前御返事』などは、妙法尼の夫の計報に接した時の御返事であることから考えても、単純にこれが動機だとは決めかねる所はある。

三項は、父母や恩ある人をたすけんが為の出家であることを示された御遺文例であるが、このことは、先の二項における無常感からの出家とのみ捉えることと同様、肯首しかねる。この様に出家の動機を意味付けるのは、聖人に限った事ではなく、後日、時代背景あるいは、聖人と同時期の他宗の祖師たちとの比較の中で検討の余地があると思うが、出家者全般に共通する意識の表現のお言葉ではないかとも思われる。

四項では、念仏に対する疑問、仏教が積尊御一人から発しているにもかかわらず、各宗乱立の結果に致していることに対する疑問から出家を発心するにいたったと述べられた遺文である。

五項は、国王が多立したり、国王が追放されたりする国家のあり方に対する疑問が、仏道に入るきっかけとなつたとする遺文例である。

この四・五項に関しては、聖人出家の年令が十六乃至十八歳ということから考えても簡単に鵜呑みにできぬ文章と思わねばならない。出家時期にすでにこの四・五項のような疑問を抱いていたとみるのは無理がある。しかしながら、ここで問題となる点はこの出家或いは修学なされる時期までに、聖人にどれ程の教育がなされていたかという点である。もちろん、残念なことではあるが、聖人出家以前の御様子に関する具体的な資料は残されておらず、不確かでもあり、聖人御自身の御言葉の中からかすかに窺い知ることができればかりである。たとえば、一の(三)「幼少の時より学文に心をかけしよ」、二の(一)「日蓮幼少の時より仏法を学び候ひしが」、四の(一)「幼少より名号を唱へ候し程に」というように、幼少の頃より学文にも仏法にもかわり合っていたと述べられ

ているのである。つまり、念仏や国法に対する疑問を持つに至る程度の教育が、幼少期において既になされていたという推察ができるのである。出家の時期までに先の五つの疑問を懐いていたという可能性はあるが、詳しくは聖人の修学の内容や出生の問題にまで入り込むのでははぶく。そこで幼少という時期の設定が問題であるが、ちなみに幼少とは聖人の他の遺文の用例から考えても元服(16)以前の年代を示すものと思われ、少なくとも聖人の出家の年齢よりも早い時期であったと規定することに決して無理はない様に思う(16)。

以上の様に、便宜上、五項に分けて聖人の出家動機に関する遺文をみてきたが、聖人の出家の動機を遺文内容に従ってまとめてみたい。

聖人は出家以前の幼少の時期、つまり十二歳に『日本第一の智者』たらんと願を立てた段階までに、学問的知識への願望や、無常感や恩に酬いることの重要性を抱いており、それを解決する為に清澄に登られ「智者たらん」という祈願をなされる。その結果後年の聖人の御言葉の如くその疑問や意識が深化して出家なさったのであって、当初から出家するのが目的ではなかった。そして次第に、仏法全般や、国法に対する疑問を持つようにな

りより『智者』への願望の意識が確立され、ついには大宝珠をうけとった自覚を持つに至る。これら遺文の流れの中からこのような一連の思考の形成過程が推定できると思うのである。

## 二

次に近代の諸説から、聖人出家に関する代表的見解を説示してゆくことで、一章の結論の補正をしてゆきたいと思う。ただしここでは概略的に述べるにとどめる。

まず、田村芳朗先生は(17)『清澄寺大衆中』の「日本第一の智者となし給へ」と言う言葉をうけられて、聖人の出家の動機として「日蓮は頭がよかったために、親は学問教育をささげようと思ひ、日蓮を清澄寺にあずけたのではないか、そうして寺では、仏教を通じて学問を受けその結果、仏教の道で身を立てようと思ひ、至ったのではなかるうか。つまり、日蓮の入山・出家の動機は、たいへん知的なものであったと思われるのである。」と規定され次の様に言葉を続けられるのである。「日蓮の清澄山入山ないし、出家の頃は父母が健在であり(中略)不幸な事件にめぐりあうこともなかった。したがって、幼少期に人生無常の感を抱き、それが日蓮の出家の

動機となったとは考えられない。」とされている。

田村先生によれば、聖人は、他の鎌倉仏教創唱者とは異なり、幼少期は平隠であって無常感を抱くはずはなく出家の動機はもっぱら知的な所にあるとされるのである。この考え方は一章であげた五項の内の第一項に分類できるが、田村先生はここにおいての「智者」を主知的・学問的智恵を得たものとして解釈されているようである。つまり智者は学問的な意味での仏教の真理の探究者としてのみ捉えられているのである。その意味では、私の分類の一項とは「智者」の指す内容が異なる。

また、戸頃重基先生(18)によると、「そもそも日蓮の出家には、法然・親鸞・道元にみられるような、はっきりした動機がみとめられない。(中略)晩年(弘安元年九月六日)の回想(19)からも明らかのように無常感が日蓮の出家の動機とはなっていないのである。たとえそこに『生死を離るる身とならむと思ひて候し』とあっても、それがどこまで実感したものか、大いに疑問しなければならぬ。(中略)日蓮が後年になって語る限りでの出家の動機には宗教的実感のうらづけが乏しい。」と述べられ、出家は主として学問上の興味の結果とみている。同様な意見として佐々木馨先生(20)の主知的出家動機論

などもあるが、ここでは略す。

次に、高木豊先生(21)は、聖人の出家の動機を無常感に求めている。『妙法尼御前御返事』の「夫以ば、日蓮幼少の時より仏法を学び候しが念願すらく、人の寿命は無常也。出る気は入る気を待事なし。」という文から、人生への無常感、そして生死をいかに乗り越えるかと言うことこそが聖人の出家の動機であったと規定されている。「人の一生において生死無常の問題が避けがたく意識されるのは、青年期とその晩年においてであろう。

(中略)青年にとって観念的であるにもかかわらず、いや観念的であるがゆえに、死は不可避な問題として迫るのである。(中略)無常感が深ければ深い程、日蓮もまたこの宗教とのかかわりあいの道を歩んでゆかねばならなかったろう。」とされている。高木先生はさらに「生死についての日蓮の疑問としての発心の契機は、源空・道元らと共通のものであり」ひいては「鎌倉仏教の創唱者たちは死・愛欲・社会という青年期が鋭敏にキャッチする問題の提起者である。」と規定されているのである。この高木先生の見解は一章の分類では二項にあたる説であるが、先にあげた田村先生の説と真っ向から対立するものであり興味深い所であるが、ここでは是非は論

しない。

清水龍山先生<sup>(22)</sup>によれば、出家動機に無常感や父母の救済をあてるのは、出家者の一般論にすぎず、妙法尼御返事<sup>(23)</sup>の念仏ひいては仏教上の疑念と神国王書の王法に対する幼少からの疑念をはらす為、十二歳で『日本第一の智者』の祈願をたて、その疑念解決の為の出家であるとされている。これは一章の五つの動機分類では第四・五にあてはまる説であらうか。

さらに山川智応先生<sup>(24)</sup>によれば、日蓮聖人の発心立願の時期を論ずとして、『光日房御書の断片』<sup>(25)</sup>、従米の伝説たる十二歳登山、十六歳又は十八歳出家の後に発心立願という説に真っ向から反対し、発心立願の結果の登山であり出家であると結論されている。その立願の内容は清水先生の説と同様に、仏教の雑乱と国の治乱の原因を究めるという為の願であって、十六歳の出家の時まででその願いがかない、極めつくして法華経に至ってゆくのであると説かれているのである。

以上、この章では、代表的な聖人出家動機を規定した諸説をあげた。

## おわりに

二章では、諸説の概略的提示を致しましたが、各結論とも、一章であげた五項の遺文にそれぞれ該当はするものの、いづれも特定のある一時点の聖人の出家理由を述べているに過ぎない。本来ある特定人物の思考あるいは思想というものは、ある日突然にまとまるものと言うよりは、思考過程という一つの流れの中で形成されるものだと思う。一時点にのみこだわるべきではない。

しかしながら、聖人の御遺文を拝する限りにおいては、明確な統一見解を立てることは難しいのである。なぜなら聖人御自身が、時により人によって出家理由を違えて解説なさるからである。この出家動機の問題が宗義を決すべき程の重大事ではない為とも考えられるが、五項に分けた遺文がいずれも、その時点は真実である為かも知れない。

最後に今まであげてきた出家動機に関する聖人の遺文その他の条件状況、二章の説などを参考に出家動機を今一度まとめてみたい。

聖人は、幼少のときから、学を志しており同時に鎌倉時代初期という時代背景<sup>(26)</sup>から考えても、無常感とまでもは言えぬが、漠然とした動乱の世情に対する疑問は出家以前(というより『智者』への立願以前)に抱いて



いたと思われる。幼少の時期設定は先に述べた通りである。その様な素地を持った日蓮聖人が、清澄寺登山当初は、知的興味が中心であったかと思われる点もあるが、次第に、二・四・五項の様な疑問を持つに致ったのであろうと思われる。その結果の一つの段階として『日本第一の智者となし給へ』という『智者』への祈請である。

『智者』となることで先の疑問の答を見出し出すのである。ここでの『智者』自体も学問的智識者から仏法の眞の理解者としての智者へと変化しているのではないか。そしてこのことはとりもなおさず、聖人を出家者となして行く一つの原因である。『智者』となることで、単に世間的学識者となることにとどまらず清澄登山以来の世の無常やら、仏教や国法の乱れやらへの疑問を解き明したいと願い、その結果として主知的な意味での答えは出家の段階以前に受け取られていたと推察できる。そしてその答えをより深化させ、より実体験化してゆく為にこそ出家なさらねばならなかったのである。先にも述べたように、聖人は最初から出家が目的で登山したのではない。また、学問の為だけでもない。ましてやある説<sup>(11)</sup>にあるように口滅しの為でもないのである。そしてその実体験化という出家修業の中で先の疑問への

最終的答として法華經を見い出されたのであることは多言するまでもない。

資料とした遺文がいずれも著作年代が晩年のものが多い、実際の出家当時の聖人の出家の動機を述べられたものが見い出せないことが残念である。また、今後の興味の対象として、聖人入滅以後の教団内において、(今回触れた諸説以外に)聖人の出家動機をいか様に捉えていたのかという点があるが、以後の私の聖人研究の一課題としておきたいと思う次第である。

#### 註

- (1) 定遺四七三頁 四十九歳
- (2) 〃 五一〇頁 五十歳
- (3) 〃 五四四頁 〃
- (4) 〃 八八五頁 五十四歳
- (5) 〃 一一三二頁 五十五歳
- (6) 〃 一一九四頁 〃
- (7) 〃 一二八三頁 〃
- (8) 〃 一三八四頁 五十五歳
- (9) 〃 一五三五頁 五十七歳
- (10) 〃 一五五三頁 五十七歳
- (11) 〃 一五八〇 五十七歳

- (12) 『日蓮―その生涯と思想』一八、一九頁
- (13) 定遺六〇一頁
- (14) 『日蓮―その人と思想』一三一、一三七頁
- (15) 元服は六歳から二十歳までに行なわれ、一般的には十二歳前後が多かった。
- (16) 「就中法然聖人幼少<sup>ニシテ</sup>而昇<sup>ニ</sup>天台山<sup>ニ</sup>二十七<sup>ニシテ</sup>涉<sup>ニ</sup>六十卷<sup>ニ</sup>…」『立正安国論』(二二七) (法然は十三歳で叡山に登っている。)
- (17) 『日蓮―殉教の如来使』一七〜二五頁『鎌倉新仏教と日蓮の思想』
- (18) 『日蓮の思想と鎌倉仏教』参照
- (19) 『妙法比丘尼御返事』定遺一五五一頁
- (20) 『日蓮とその教団』第1集『日蓮の思想構造』
- (21) 『日蓮―その行動と思想』一七〜二三頁『日蓮とその門弟』参照
- (22) 『日蓮聖人の生涯』参照
- (23) 『妙法比丘尼御返事』と同じ
- (24) 『日蓮聖人研究』参照
- (25) 『破良観等御書』と同じ
- (26) 龍爾著『鎌倉時代』上巻・『日本史用語辞典』等参照